

地域環境のミクロコスモス粟島見聞録

山中 知彦

1. はじめに

私は2009年4月に、地域環境コース科目を担当するため、新設の新潟県立大学国際地域学部へ赴任してきた。最初に取り組むべきは新潟県域に係る土地勘を得ることであった。最初のまとまった現地踏査は、海に囲まれたミクロコスモス粟島から始めようと考え、梅雨明けを待って8月の4日から6日にかけての2泊3日の踏査を行った。本稿はその時の記録を、担当科目「都市・地域デザイン演習」における現地踏査法の参考資料としてまとめさせて頂くものである。

2. 事前情報収集

現地踏査を行う前の情報収集の方法としては、文献やインターネットと現地を知っている人からのヒアリングの二通りがある。文献・ネット検索で情報の全体像を掴んだら、現地を知っている人を探す。

まず新潟県内育ちで地域学に詳しい国際社会学のW教授に相談すると、最新の粟島浦村発行の観光パンフレットを提供してくれた上で、かつて粟島で調査を行っていた文化人類学のK教授を紹介してくれた。K教授に情報提供をお願いすると、県立新潟女子短期大学のK研究室のフィールドとして、2年連続で行った卒業研究報告集を貸してくれた上で、当時の人脈や報告集には記述の無い島内の政治的状況、とりわけ直近の村上市との合併の是非が争点となった村長選挙では、4票差で反対の立場の候補が、合併推進派の現職を破って選出され、現在県内で最も小さな人口360人の独立村を維持しているとの情報を得ることができた。

島内には、村上の岩船港と航路で結ばれた東海岸の内浦と、西海岸の釜谷の二つの集落がある。島内での移動手段をレンタサイクルと想定し、各集落で1泊ずつの2泊3日の行程を組む。1泊目はK研究室の常宿としていた釜谷の民宿M屋で宿泊とヒアリングを予約し、次に粟島浦村役場に行行政ヒアリングの予約と、規則で1日ごとに返却が定められたレンタサイクルを2日連続で借りられるよう交渉。さらに観光協会に電話し、内浦でのヒアリングに向けた2泊目の民宿Tを紹介してもらった。

3. 1日目

当日は朝から快晴。岩船港発9時30分の高速船に合わせ、白新線・羽越線を乗継ぎ村上駅へ。朝食は、沿線風景の変化を見ながら駅の売店で買ったサンドイッチで車中食。村上駅から岩船港への公共交通の連絡は極めて悪く、タクシーを使わざるを得ない。運転手から岩船近辺の情報を聞き出す。現地踏査では、機会あるごとに現地の人から話を聞くことが大切。約1時間の高速船の船内では、持参したK研究室の卒業研究報告書の目次を見て、現地をまわる前に読むべき論考に目を通す。予定通り内浦港に接岸した高速船からすぐ近くの役場に直行、事前に電話対応してくれた職員とヒアリング対応してくれる職員に挨拶を済ませ、役場で発行している参考資料を購入し、2つの集落の住宅地図をコピーサービスで入手し、自転車を借りて出発。

まず港近くにある郷土資料館に立ち寄り、展示とビデオを見る。この間に5～6人の老若男女の集団が来館。宿泊先の民宿の方が宮城県から研修にきた学校関係者を案内している模様。耳に入った話から、彼らは午後大謀網漁の見学を予定しているらしい。大謀網漁は北陸近海で広く行われてきた漁法で、粟島では郷土資料館の展示や観光パンフにも紹介されている。事前のK教授の話では、観光目的化しているようなので見たことはないとのこと。今回の単身踏査では見学を予定していなかったが、団体のご相伴が可能なら見るのも良さそうである。

資料館の職員に海沿いの道を確認した後、釜谷に向け一路出発。道はほぼ直線状で、途中からかなりの勾配の上り登り坂になり、荷物を背負ってはペダルは回らず、延々押して登る。島南端の矢ヶ鼻を過ぎると一転し屈曲の多い下り坂になり、釜谷までほとんどペダルは漕がずに到着。集落で唯一の食堂で昼食を予定していたが、あいにく昼時で満席、おばあちゃん一人で切り盛りしている様子なので待たずにまず民宿M屋へ。おかみさんに部屋に案内してもらい、宿帳を記入し、早速大謀網漁の情報を聞く。見学受入漁船は内浦港から間もなく出発で、丁度釜谷から加わる漁師さんの車に相乗りさせてもらえるように計らってくれたため、その日は昼食抜きとなる。現地踏査では予定に拘ることは禁物で、現地の状況に合わせるのが鉄則。老漁師さんの運転する軽トラで内浦港へ向かいながら聞いた話の概略は次の通り。

●大謀網漁乗組員（釜谷）Mさん（75～76歳）の話

- ・大謀網漁は、午前4時台と午後2時台の1日2回通年で行っている。定置網を仕掛けたら獲らないと魚が逃げるので1日2回にしている。今回見学する場所は東海岸北部。乗組員は内浦6名釜谷3名。
- ・近年漁獲量の減少（磯焼け）と魚価の低迷で定置網以外の個人漁業は、民宿の食材捕獲を除き衰退気味。
- ・定置網で獲った魚は、マグロは築地（量が少ない場合は新潟・金沢）の市場に出す。運搬路はフェリーで村上、以後トラックで陸路。
- ・網のメンテナンスは年1回陸に上げて行う。

2艘の漁船で網を絞り、マグロを一本ずつ甲板でメる漁は圧巻。約2時間の見学中、同船した見学者は資料館で会った集団に、さらに親子連れが加わる。そのうちの2～3名が極度の船酔い状態となり海へ嘔吐を繰返すが、当然漁は続けられる。乗組員の話では、当日の水揚げ本マグロ2～30匹はやや不漁とのこと。

港から宿への帰路は、おかみさんが車で迎えに来てくれる。帰路の車中で聞いた話の概略は以下の通り。

●釜谷の民宿M屋のおかみさんMさん（54歳）の話

- ・栗島の漁法は定置、トロールに分けられる。
- ・M屋では刺し網（定置の一種）をご主人がやっている。刺し網は約200mの長さの直線状の網で魚を引っ掛ける漁法。両端に黒と赤の旗をつけて位置を示す。手間がかからないので民宿と両立可。
- ・トロールは船から流した釣糸で捕獲。マグロなども釣れるが時間をとられるので民宿ではやらない。他に延縄（はえなわ）もあるが、釜谷でやっているのは5人。
- ・大謀網漁は、栗島に3箇所。釜谷の大謀網は5～6月に獲れすぎて、魚を浜に揚げてからの仕分け人足不足で、今はブイだけ残して網は揚げてしまっている。
- ・栗島ではほとんどの世帯が船を持っている。漁場は自由だが、他の部落の近くの海には遠慮して行かない。

宿に戻り、夕食までの時間を近くの海水浴場で夕陽を楽しみながら過ごす。海岸は磯とごろた石の浜。海面下もごろた石で埋め尽くされ、波の荒さを伺わせる。

文字通り魚尽くしの夕食に感激。昼食抜きの胃に、中越の蔵元に委託醸造し海洋深層水で仕込んだという清酒「栗島」がしみる。食事を取りながら、神奈川から釣り目的で来島しているおやじから栗島の釣り講釈を受ける。食事は楽しみながらの情報交換の場。

ほろ酔い加減で部屋に戻り、役場で購入した資料に目を通すうちに心地よい疲れに誘われ、深い眠りに就く。島の歴史についての記述の概略は以下の通り。

●栗島の歴史の概要＝「あわしま風土記」より

島名の由来として、粟粒や泡のように小さい意味という説がある。古来、蝦夷人が暮らしていた本島に8～9世紀の頃北部九州の海の民マツラ（松浦）の一党が渡来

し、さらに半世紀後に越前海岸からホンボ（本保）一族が漂着し、現在の釜谷集落の松浦姓、内浦集落の本保姓につながっている。しかし、明治時代の度重なる大火によって、それ以前の史料はほとんど失われた。

4. 2日目

翌朝はやや薄曇り。朝食前の1時間、釜谷集落の探索に出かける。海岸沿いの1本の車道以外は、斜面に並行する路地と直交する階段によって集落内の動線が構成されている。路地や階段の上部には、ところどころ2階レベルで廊下が架けられ、M屋など一部例外を除き木造2階の住居が軒を接して高密度に建てられている典型的な漁村集落。集落の南端に、廃校となった木造の釜谷分校が狭い敷地いっぱい建つ。教室に入ると、昨日まで子供たちが学んでいたように、止まった時間が取り残されていた。集落背後の神社は、急な階段の参道を登った一段高い平場に設えられ、集落越しに海を一望できる。神社境内と集落の境には、海難事故から漁師を守る地蔵たちが海の方向を向いて安置された建屋がある。

朝食は浜料理のワッパ煮で、焼いたごろた石を具と出汁の入ったワッパに入れ沸騰させた後、味噌で味をつける。当朝のM屋のワッパ煮の材料はメバルとカワハギ、調味料の味噌は家によって味がまったく異なるとワッパ煮担当のご主人（60歳）の話である。

客の出発が済んだ頃合いを計り、おばあちゃんへヒアリングをお願いした。概要は以下の通り。

●民宿M屋のおばあちゃんMさん（数えて85歳）の話

- ・内浦から19歳で釜谷のM家に嫁ぐ。8人兄弟の4番目。長男のみ在島し他の兄弟は島外（東京）に出たか亡くなったかいずれか。
- ・母は内浦の旅館の長女。母は弟が生まれた後分家に養子に出される。
- ・嫁ぎ先のM家は現在の長男の代で民宿3代目。嫁は釜谷の親類からもらう。
- ・子どもは長男と長女（阿賀野に嫁ぐ）、次女（新津に嫁ぐ）の3人。子育てするころは貧しく、女の子は中学出ると島外に就職し、自力で定時制高校に通った。
- ・ご主人は10年前に他界。ご主人のお父さんは、昭和30年ころ鯛釣りの釣り宿を経て、栗島での初の民宿開業。大謀網漁の再興やあわび会の結成、島外業者の誘致など栗島の産業起こしに尽力した人。
- ・嫁いで来た頃は釜谷は磯で港がなく、その後部落のみんなで石垣を積んで現在の港の前身をつくった。
- ・当時は婦人会活動が盛んで、村の発展が生きがいであった。大量に獲れたイワシをカスタキして肥料をつくって出荷していた。
- ・新潟地震では海の水が引き、津波を恐れみんな山に避難し4日間程野宿した。海の水は引いたまま（島が隆起）で、当時砂浜だった内浦では砂が消えてしまった。

- ・新潟地震前は内浦に田んぼを持っていて内浦の人に耕作してもらっていた。地震後は水田の水がなくなり畑として耕作してもらっていた。
- ・米は収量が少なく、当時の主食は麦飯で、その他大豆や小豆をつくっていた。
- ・民宿を始めて徐々に客が増え、増えた客を当時釣舟の船頭をお願いしていた部落の人々に分けて、徐々に釜谷の民宿の数が増えていった。民宿の最盛期は昭和48～50年頃で、一軒で年間千人の客を受けていた。秋田や新潟方面からの客が多かった。
- ・昭和33年に家の山の木（ケヤ+杉）を伐って最初の増築をした。その後昭和50年ころと平成7年に再増改築し現在に至る。

おばあちゃんへのヒアリング終了後、西海岸沿いに一路内浦を目指す。海岸線は複雑に入り組み、オオミズナギドリ営巣地の立島や仏像漂着のいわれのある仏崎など、ダイナミックな自然景観が続く約2時間の道中は、高低差もあまり無く、良く管理された道路で数台の車と出会う程度の交通量。二つの集落を往来する車の



でのんびりと甲羅干しに充てる。この頃までには空も青く澄み渡り、対岸の村上方面の山々が薄っすら望める浜は、昨日の釜谷の海岸とは全く異なる栗島の海の印象を与えた。

午後は役場で行政ヒアリング。概要は以下の通り。

●教育委員会Hさん(56歳)の話

- ・栗島の産業は、漁業も低迷し、観光も民宿が最盛期から半減し、厳しい状況にあり打開策を模索中。
- ・村では今年度から栗島ドリーム事業に取り組み始めた。この事業は国の補助事業「地方の元気再生事業」に応募したが採択されなかったアイデアをとりあえず村単事業として始めたもの。事業の柱は3本で、オオミズナギドリ+野生馬+竹林にちなむエコツーリズムが基調。事業を進めるにあたり、村民と村外の有識者との協議会をつくっている。
- ・村では村政振興の応援団として大学の先生などとの関係をつくりたいと考えており、現在栗島ドリーム事業

ほとんどが、峠越えの最短ルートを使っているためである。島の北端の鳥崎を回るとにわかには屈曲が減り、道沿いに畑が垣間見られるようになる。昼前に内浦に着き、宿泊予定の民宿Tに荷物を預け集落の商店で昼食のパンや果物・飲物を調達し、港の南に続く砂浜の海水浴場

などを中心に、長岡技科大（オオミズナギドリ関係）、東京農大（野生馬関係）、東北公益文科大学、文教大学（エコツーリズム関係）、東京海洋大学などの先生方をお招きしている。

- ・また、村民中心に地域活性化協議会を組織し、地図づくり+直売所+郷土料理研究などを実施している。
- ・今年取組んでいる交通社会実験（コミュニティバス+乗合タクシー）は国の補助を受け3年継続予定。
- ・飛鳥の実績を参考に昨年からは始めたクリーンアップ作戦は、昨年は内浦の海岸だけで行ったが、今年は釜谷の海岸も加え、参加者は島内100名、島外200名であった。ボランティアの集客には、県の村上振興局や市町村課が積極的に応援してくれた。
- ・国の人材派遣事業を通して男女各1名の若者が役場で働いており、男の職員は島の環境が気に入って、任期後も島に移住する決断をしてくれた。
- ・村の子どもは中学を卒業すると島を離れ、村上の宿舎などから高校へ通うことになる。昨年度の受験生に県立大学も紹介したが、結局国立の静岡大学に進学した。行政ヒアリングの後、内浦の集落探訪を行う。釜谷と異なり、平地の上に港に沿った複数の車道と直交する数本の路地によって動線が構成され、集落内には巨木が生い茂る社寺地が散在する。戸数や一戸当たりの住居規模も釜谷よりはるかに大きめである。

探索後、集落の北に続く海水浴場で海を眺めて過ごす。沖には昨日見学した大謀網漁の漁場を望む位置である。その後、集落に隣接する温泉施設「おと姫の湯」で塩気を洗い流し、宿に戻って昨夜に勝るとも劣らない魚尽くしの夕食と再び地酒「粟島」を味わい、昨日にも増した心地よい疲れの中で、早めの眠りに就く。

5. 3日目

朝食後、やはり客の出発後を見計らい、民宿のご主人へのヒアリングをお願いした。概要は以下の通り。

●民宿T主人I氏（55歳）の話

- ・I家は分家後5代目、民宿経営は父親の代からで2代目。宿を引き継ぐ以前は粟島汽船に昭和48年から平成8年まで22年間勤め、その時の客商売の経験が役立っている。県外の国立大学に進学した子どもたちは今のところ後継の意思を示していない。
- ・合併にはもともと反対で、粟島の存続のためには小さくも一国を守るべきだと思っている。また、日本海の離島で国を守っているという気概もある。
- ・現在旅館組合長、観光協会理事、活性化委員などを務める。28歳のときに粟島で一番若い教育委員に就任。現在は奥さんが教育委員を務める。
- ・民宿の数は最盛期の69（内浦45+釜谷22）軒から現在42（内浦26+釜谷16）軒となっている。減少の主な理由は経営者の高齢化であり、内浦に比べ釜谷の減少率

が少ないのは、釜谷のほうが公務員他の生業が成り立ちにくいためであると思われる。

- ・旅館組合は会費1万3千円で、イベントの開催や個々の民宿の様々な相談に乗っている。組合としての決め事は料金設定や料理7品目以上などがあるが、細かいことは個々の宿に任す方針。
- ・入れ込み客の客層は様々で、中越沖地震の際、被災地で受け入れられなくなった客を肩代わりし、それ以来気に入られてリピーターになった客などもある。
- ・組合長になってからタコ獲りツアーや七夕サマーなどのイベントを開発。以前はお盆を過ぎるとシーズンが終わったという印象の民宿業者に、9月まで気を抜かないイメージを与えることができた。
- ・観光協会は専従2名体制で、それまで役場や旅館組合、汽船に分かれて重複していた業務を一元化した。
- ・村の観光収入は7億円（粟島汽船を除く）、漁業3.5億円（定置1.5億、他2億）となっている。
- ・粟島汽船の役割は観光以前に島のライフラインであるため、フェリー2艇+高速船（主に観光）を就航。佐渡汽船の現役引退後の船を使ってきたが、2年後には次の代を確保する必要があり、国の補助でそれが可能となっている。（合併した場合を想定するとライフラインが削られる恐れもあった）

ヒアリング終了後、島内一周の観光船で2日間かけて陸路で回った海岸線を海上から再確認することにした。景観や植生は、陸路よりも海岸線をつぶさに見ることのできる海路から確認できた。地形が平明で樹木の高い東海岸と西海岸の複雑な地形と強風の形跡が残る樹形が、小さな島内でも異なる地域環境の存在を示していた。しかし、それ以上に体感できたのが波の荒さで、矢ヶ鼻に出ると同時に小さな観光船は大きく揺れ出し、鳥崎を回るまで波しぶきが眺望を妨げる場面が続いた。

港から12時30分発のフェリーで粟島を後にし、岩船港から社会実験中の乗合タクシーで村上駅へ戻った。

6. おわりに

今回の踏査でも、粟島の東西・内浦と釜谷・そこに暮らす人々それぞれの「地域」の存在が示された。また、それは粟島固有であるとともに、佐渡や本州にも通じる地域性でもあり、全ての地点にはそれぞれ異なると同時に共通する地域性が付与されており、地点の地域性の集合をマクロスケールで見たときに次のレベルの地域性を表すと考えられる。さらに、「地域」とは、自然的存在としての空間にも、あるいは歴史的事実にも存在するものでなく、空間や時間を認識する人間の意識の問題である。いわば「地域」を形成する「点」は最終的には個々人の「意識」に回帰し、「意識」の集合を形成することが「地域づくり」であるといえよう。

注) 図は平成14年国土地理院発行1/25000「粟島」を転載